



香良洲の花見

寛政9(1797)年3月20日に松阪の国学者^{もとおり}本居宣長^{のりなが}が門人たちと香良洲で花見を行っています。現在の暦で4月16日に当たるこの日の花見の様子は門人の岡山正興^{まさおき}が残した歌の記録の「香良洲の花見」に詳しく記されています。

それによると、その年は桜の開花が遅く、見頃を心待ちにしているうちに、咲き始めの頃から雨が続いたため、ようやく晴れた20日に花見に出掛けたとあります。宣長一行は、松阪を出て曾原で伊勢街道から香良洲道へと入り、笠松を経て対岸の星合から渡し舟で雲出川を渡っています。しかし、そこから香良洲神社までの沿道の桜並木は、すでに多くが散ってしまっていたようです。

その後、香良洲神社を参拝した一行は、浜辺に出て、海に浮かぶ釣り舟や遠くは南の伊勢の山々、東には霞がかった尾張・三河の山々と、のどかな春の海を眺めました。そして松の木陰にむしろを敷いて酒を飲み、歌を詠み交わし、さらに香良洲神社の宮司や津の門人たちも加わって、夕方まで花見の宴を満喫したとあります。

この花見で一行が詠んだ歌は60首を超え、宣

長のものには次の歌などが残っています。

からす崎 なみ木の桜 きのふ来て
見てまし物を 盛り過けり
来ても見て 早く散りにし 花ゆえに
雨のうらみは いつかはるへき
浦の名の からすにはあらて さくら花
松のこのまに 鷺^{さぎ}かとそ見る
のどかなる 春の海へそ たたならぬ
花はなけれど 浦の松原
さくらこそ 盛過ぬれ 見に来つる
かひは有りける 春の海つら

このように見頃を過ぎた桜や香良洲の海、松原に寄せる心情が詠まれています。

かつての香良洲神社は、江戸時代の伊勢参宮のガイドブックである伊勢参宮名所図会^{ずえ}に紹介され、その境内は現在の市名勝香良洲公園を含む広大なものでした。宣長一行がどの辺りで花見を行っていたのかは定かではありませんが、香良洲橋も新しく架け替わったこの春、宣長の足跡をたどって香良洲地域を訪ねてみてはいかがでしょうか。



現在の香良洲公園の桜(ソメイヨシノ)

